

かわいい妹

越前市武生第一中学校 三年 藤田 爽叶

私の八歳下の妹は、パツチリおめめのたれ目ちゃんです。姉である私から見てもとてもかわいくてうらやましい。

歳が離れているため、母が妹を出産する時も立ち会い、生まれたばかりの時からだっこしてミルクをあげたりオムツをかえたり。妹の成長を近くで見えてきたというのもあってか、かわいくてかわいくて仕方ない。

が、家族以外の人に妹を見られることが嫌だった。斜視。目の病気。目が見ようとするものに対して、目標と違う方向を向いてしまう。妹は、生まれつき斜視という目の病気を持っている。

私がこの病気について知ったのは、妹がこの病気だということになった時だった。生まれたばかりの赤ちゃんは、視力が発達していないため、視線が合わずどこを見ているのか分からない。成長するにつれて、視力も発達し、だんだん目で物を追うことができるようになる。すぐ下の妹は、そうだったから一番下の妹の目が普通の子と違うということはずぐに分かった。

何か他の赤ちゃんとは違う。目が合っていない。どこを見ているの？本当に私を見て笑っているのか？妹が成長していくのと

同時にどんどん不安な気持ちは大きくなっていった。

そして、家族以外の人に妹を見られることが嫌になった。

妹の斜視は、左の黒目が外側へずれる外斜視というものだ。その中でも、通常の目の位置は大体正面にあるが、疲れている時や眠たい時、遠くを見たりものを見上げたりする時に黒目がずれる。「間欠性外斜視」というもの。また、視力は悪くないのでパッと見では全く斜視は分からない。でも、二、三時間生活している所を見れば分かってしまう。妹の目が変わ。誰にも気づかれたくない。見ないでほしい。恥ずかしい。「○○ちゃん、何か目変じゃない？」そんなこと言われたら、知らないふり、聞こえないふり。自分の妹だと思われなくなかった。かわいくて仕方ないのに……。私は、ただ自分が人にどう思われるか、ただそればかり気にしているつまらない人間なのだ。

妹が年長さんになった頃、

「私も習字をやりたい。」

と、まだ平仮名も習っていない幼い妹が言いだし、私が小学生の時から長い間通い続けている書道教室に行くことになった。斜視である妹と一緒に、私が頑張っている書道教室に通うなんて……。とまどいながら、仕方なく……。妹は、家でも字を書くことが好きでよく私が宿題をするとなりで字を書いていた。書道教室でも、先生のお手本をよく見て集中して字を書く。小さい時は人見

知りがひどく、自ら知らない人と会うときなんて完全に拒否して
いたし、泣いてばかりだった。そんな妹が書道教室に行つて字を
書いている。さらに、書道教室の先生にほめられているなんて。
驚きと自分が今まで他人に妹のことを見られたくないと思つて
いたことが悔やまれる。

妹の誇らしい姿に心が動かされる。私の中にあつた「障がい者
|| かわいそう」という公式。これが正しく差別なのだと思う。人
はみんな一人一人違う。見た目はもちろん、好きなものも得意な
ことも。健常者、障がい者。白人、黒人。一人一人の個性。そう
考えると、妹の斜視も個性の一つなのだと感じる。上手くなくて
いい。得意でなくてもいい。存在すること自体が特別。みんな違
つてみんないい。ありきたりな言葉かもしれないが、本当にそれ
が全てだと思つた。

そこから、妹の斜視は未だに治つてはいない。書道も続けてい
る。小学校にも楽しく通っている。何も変化していないが、妹が
かわいくて仕方ない。友人にも近所の人にもみんなに見てほし
い。そして、大きな声で言いたい。

「私の妹は、こんなにかわいいのだよ。」
と。

差別の無い社会。一人一人の個性を尊重できるそんな素晴らし
い社会を目指したい。